

「ヒラタダイゴフツ」 — 運命に抗う禍

フツ科

危険度：★★☆☆☆

生息数：★★★★☆

生態

ヒラタダイゴフツはその名の通り、非常に平たい身体を持ったフツ科の禍である。身体の裏側は面積の大部分が摂取口になっているが、この部分は口というよりは胃袋の働きを持つ器官であり、その部分を脳に押し付けるようにしてゆつくりと摂取行動を取る。この禍は人間の「受け入れる」という部分の脳を摂取し、憑かれた人間が「受け入れ」られる容量を少なくしていくのである。この禍も近代以降に数を増やした禍として有名である。

解説

「受け入れる」という感覚を考えるときに最も大事なものは「運命」という言葉である。一般的には運命という言葉は「人間に与えられた人間にはどうしようもない状況・流れ」という定義で使われるが、この定義は非常に曖昧である。この定義で考えると、例えば「顔」は整形手術で変えられるので、その顔で生まれたことは運

命ではないということになる。しかしそのような考え方をしたことがあるだろうか？ どちらかと言えば今の顔で生まれたのは運命だと認識している人間が多いのではないだろうか。実は「運命」という言葉は単に物事を「自力でどうにかできるか」で分けるための言葉ではなく、「諦めて受け入れた方が不禍になれることか」で分けるための言葉なのである。もちろん諦めないで抗ったほうが良い結果になる状況に對しても「運命」という言葉を使うが、それは二次的な意味合いであり、そもそも抗える時点で一般的な言葉の用法にも反している。単に抗う対象が「与えられた」ものであるということとを強調する目的で使われているのである。しかし実はこの二次的な用法がヒラタダイゴフツに付け入る隙を与えている。この禍は人間の「与えられたものに抗いたい」という本能を増幅する作用を持つ体液を分泌し、本来「運命」として受け入れた方が良い対象を攻撃対象にしてしまう。そうして憑かれた人間が「受け入れる」という脳を使っていないうちにその脳を摂取するのである。この禍は摂取行動を取っている間もどんどんその体液を分泌するので、憑かれた人間は更に「与えられたものを探して攻撃対象へと変えていく。「与えられた」ものであつても攻撃したほうが不禍になるとは限らず、諦めたほうが不禍になる「運命」も含まれている。それを考えて区別する努力からも解き放たれるので、この状態になってしまつて自力での禍に打ち勝つことは非常に難しくなつてしま

対処法

この禍が近代以降に数を増やした理由はまず社会の改善である。人間は昔から社会的に不公平な状況で生まれ、生きてきた。よつて与えられた状況に抗うことは必要であつたが、その不公平の絶対量が多かつたために「何に抗うか」という思考能力は必要とされてこなかつた。それが近代になり、社会的な不公平が是正されてくると状況が変わつてくる。そもそも今の状況がシステマ的に理想的（とまでは行かなくとも明らかな改善策が見えない状況）であるという可能性が局所的に出てくるのである。そういった場合に抗う対象が簡単には見つからず、「与えられたものに抗いたい」という本能との付き合い方が個人の問題として新たに浮上してくるようになる。

そこで以前ならば抗う対象にあがらなかつた「自分自身「運命」に矛先が向けられやすくなつたのである。つまりヒラタダイゴフツへの対処法は、抗いたいという欲求を理解し抑えることである。また本当に冷静な判断により「抗うべき」と判断されるものを見つけたとき、抑えていた欲求を全てぶつけるようにすることも大切である。死ぬまで欲求を抑え続けることは非常に難しいので、常にその欲求の正しいはけ口を探すことも自分自身との付き合い方として重要なのである。

